

【連続展】

浜昇の 戦後と昭和

Noboru Hama:
Postwar and the
Shōwa Era



photographers' gallery

浜昇の 戦後と昭和

*Noboru Hama:
Postwar and the
Shōwa Era*

【連続展】

Vol. 1

津軽野 | 2026年1月26日-2月8日

Vol. 2

斯ク、昭和ハ去レリ | 2026年3月予定

Vol. 3

沖縄という名 | 2026年5月予定

Vol. 4

VACANT LAND 1989 | 2026年7月予定

Vol. 5

TOKYO MIDNIGHT | 2026年9月予定

Vol. 6

灰と蝶 | 2026年11月予定

photographers' gallery

開廊時間:12:00-20:00 | 会期中無休

160-0022 東京都新宿区新宿2-16-11-4F

Tel. 03-5368-2631

info@pg-web.net

pg-web.net/exhibition/noboru-hama-postwar-showa/



このたびphotographers' galleryでは「浜昇の戦後と昭和」と題し、浜昇の連続写真展（全6回）を開催いたします。

浜昇（1946年、東京生まれ）は、1975年に東松照明や森山大道らが講師を務めた「WORKSHOP写真学校」に参加後、自主ギャラリー「PUT」設立に携わり、80年代に差しかかるまで個展・グループ展を通じて精力的に作品を発表します。その後も撮影を継続しながら、自ら設立したレーベル「写真公園林」での出版活動へと軸足を移し、写真展を含めた発表の場からは次第に距離を置くようになります。

しかし2000年代に入ると、バブル景気の地上げ等で虫食い状態となった東京を記録した写真953点を収めた『Vacant Land 1989』にはじまり、「本土復帰」後から90年代までの沖縄を記録した『沖縄という名』、昭和天皇の国葬当日とその前後の東京を記録した『斯ク、昭和ハ去レリ』へと、昭和を総括するかのように写真集を続けて刊行しています。

そして2025年6月、当ギャラリーの出版レーベルKula Booksでは、浜の6冊目となる写真集『津軽野』を刊行しました。これを機に、写真家・浜昇の50年にわたる仕事の軌跡を辿りなおす試みとして、未発表作と最新作を含む6つのシリーズからなる連続展を開催いたします。



開催期間

—

2026年

1月26日[月]—2月8日[日]



vol. 1

津軽野

2020年、約40年の時を隔てて浜は津軽を再訪する。かつてカメラを手に歩いた漁港や農村は賑わいを失い、時の流れが廃屋や空地の目立つ風景に深く刻み込まれていた。浜は「この津軽行きがなければこの写真集は作らなかっただろう」と語る。

浜がはじめて津軽を訪れたのは1975年、半島の北端では青函トンネルの工事が本格化している頃だった。それでも津軽にはかろうじて共同体が息づき、北の人々の構えない暮らしぶりがあった。大地と海に抱かれるように暮らし、長い冬を終えては短い夏のひとときに夏祭りに興じる人々の姿。同時期に通いつづけた沖縄の政治的な緊張感から浜のこわばりは解きほぐされていく。

北海道でも下北でもない本州の北限、太宰治や高橋竹山を育てた津軽。40年の歳月がもたらした風景の変容への反動から紡がれた『津軽野』は、追憶の余韻を湛えながら、近代化の果てに失われてきたものの在処を知らせている。

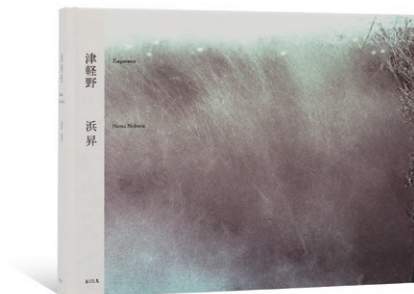


浜昇『津軽野』(2025年)

B5変型判|上製|モノクロ・カラー|200頁

寄稿:高橋しげみ「津軽野に見る夢」

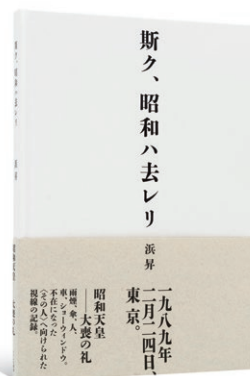
発行:Kula Books 定価:6,300円+税





昭和 ハ去 レリ

2019年、平成から令和への改元を目前にして『スク、昭和ハ去レリ』は刊行された。写真集を構成しているのは、昭和天皇の吐血報道から4日後の1988年9月24日、死去翌日の1989年1月8日、国葬が執り行われた同年2月24日の計3日間に撮影された写真である。目を引くのは、収録された写真すべてがまるで1日で撮られたかのような天候の一致だ。浜はこの雨模様を「まるであらかじめ巧妙に計算されたかのようにだった」と語る。それだけではない。天皇裕仁はバブル経済の只中に死を迎えた。戦後をアメリカに生かされた〈その人〉は最期まで繁栄の印たりえ、90年代初頭のバブル崩壊や冷戦構造の消滅を目にすることはなかった。浜は意図的に階調の出ない沈んだ印刷を心がけ、「万世一系」の清き白に対抗する汚れた白のイメージをそこに仮託し、ささやかな反骨精神を伝えている。



浜昇『スク、昭和ハ去レリ』(2019年)
A4判|上製|モノクロ|92頁
発行:ソリレス書店 定価:5,800円+税



開催期間
—
2026年
3月予定

vol. 2

ス ク、

開催期間

—

2026年

5月予定

vol. 3

沖縄という名

1972年5月の「本土復帰」の翌月に、浜はじめて沖縄を訪れる。以来、幾度となく沖縄を訪れては撮影してきた写真を2017年、『Positions 1969-1988』『あなたへの海』『シマ それ自身の終わりなき時へ』の3部からなる写真集『沖縄という名』として刊行する。

——沖縄を訪れる時、浜はまず周辺の離島を巡ってから本島へ向かうことを常とした。与那国・波照間から与論・喜界島まで、沖縄本島からさらに隔てられてあるシマ。悠久の時に育まれたその風土に触れることは、浜に畏敬の念とともに夢見心地の体験をもたらしたという——『シマ それ自身の終わりなき時へ』。

——眩しい光のなか沖縄の自然や文化が放つ極彩色の風景は、政治的な風景の背後にある沖縄のもうひとつの側面を伝えている。果てには海ばかりが広がるその景色は、海のかなたにある彼岸・ニライカナイの伝承に繋がる一方で、自然の厳しさや資源の乏しさを痛感しながら生きてきた人々の歴史にも思い至らせる——『あなたへの海』。

——ウチナーンチュ／ヤマトンチュ、日本／アメリカ、個人／国家……。複数の対立する立場が交錯し、非対称な地位にさらされる沖縄において、ヤマトの写真家はつねに自らの立ち位置を問い返すことになる。はたして沖縄を撮影するにあたって、確かなポジションはあるのか、ありえるのか、と——『Positions 1969-1988』。



沖縄という名

シマ

それ自身の終わりなき時へ

浜昇『シマ それ自身の終わりなき時へ』(2017年)

A3変型判|上製|モノクロ|144頁

発行:ソリレス書店 定価:4,600円+税





沖縄という名 かなたへの海

浜昇『かなたへの海』(2017年)
A3変型判|上製|カラー|124頁
発行:ソリレス書店 定価:4,600円+税



沖縄という名 Positions

1969-1988

浜昇『Positions 1969-1988』(2017年)
A3変型判|上製|モノクロ|148頁
発行:ソリレス書店 定価:4,600円+税



開催期間

—

2026年

7月予定

vol. 4

VACANT LAND 1989

バブル経済が最高潮に達した1980年代末、東京の中心部では地価高騰の波に乗って地上げが横行していた。それは四谷に暮らす浜にとっても他人事ではなかった。身近な人々が街を去り、あるいはこの世を去った。取り壊された家々、生活の基盤を失った人々。写真集に収録された953点の写真にそれらは写っていない。しかし、浜はその不在を意識している。戦争を生き延びた世代が建てた家は次々と壊され、空地となった。浜は言う、「これは2度目の敗戦だ」と。『Vacant Land 1989』は、バブルの狂騒の果てに残された風景の記録にとどまらず、戦後日本を覆いつづけてきたアメリカとの歪な関係がもたらした代償を伝える視覚的証言でもある。

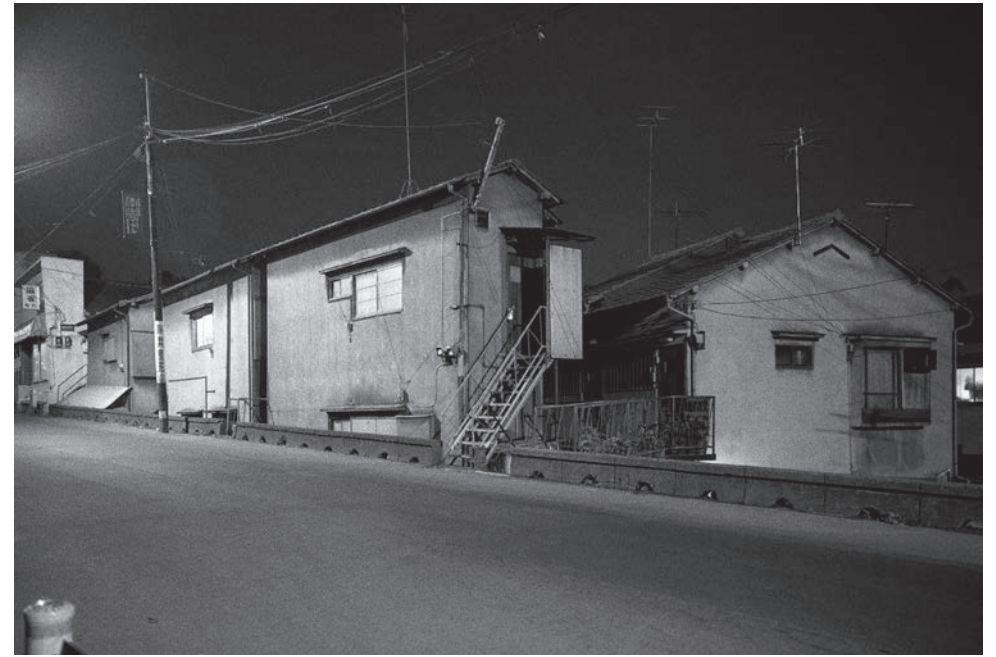


浜昇『Vacant Land 1989』(2017年)

A4変型判|上製・函入|モノクロ|1012頁

発行:photographers' gallery 定価:15,000円+税





TOKYO MIDNIGHT

開催期間

—

2026年

9月予定

vol. 5

暗闇に浮かび上がる街灯、家々の灯り。1970年代半ばに撮影された東京の夜。商店や集合住宅、バラックは、くっきりとしたディテールを帯びて佇んでいる。ここに写されているのは失われた風景、すなわち浜自身がのちに身をもって体感することとなるバブル期の地上げ以前に、確かに存在していた風景である。同時にそれは、敗戦後のゼロ地平に築きあげられてきた復興の証でもある。埋め立てられたばかりの東京湾の風景で締めくられるこのシリーズは、やがて訪れる大規模な都市開発の予感に満ちている。「Vacant Land」の空地にかつて立ち並んでいた東京の住居群が、亡霊のように今ここに呼び戻される。

開催期間

—

2026年

11月予定

vol. 6

灰と蝶



「灰と蝶」には、那覇市波上宮に立つ歌碑を写した一枚がある。「思はざる病となりぬ沖縄をたづねて果たさむつとめありしを」。戦後巡幸を含め、在位中に一度も沖縄に足を踏み入れることのなかった昭和天皇が、1987年の沖縄訪問中止に際して詠んだ歌である。

『沖縄という名』を刊行後に浜は、6月23日「慰霊の日」に繰り返し沖縄を訪れるようになる。かつて沖縄に通っていた頃は意識的に撮影を避けていた沖縄戦の戦跡や強制集団死のあった場所など、沖縄の「現場」を訪ねることから撮影を再開する。強制集団死をめぐる浜は、ときに「集団自決」と表記されもすることに危機感を示している。「自決」という言葉がもたらす自発性の響きは、国家がもたらした加害の構造を覆い隠してしまう。遺族の意思に反して靖国神社に住民たちが合祀されている事実をのちに知った浜は、衝撃を受けたという。住民の意思と国家の思惑のねじれ、あるいは両者を隔てる距離。その隔たりのなかでなお、死者を弔うとはどういうことなのか。戦後翌年に本土で生まれた浜は、自身と沖縄との埋めがたい隔たりをも見つめながら沖縄に足を運びつづけている。



独立を貫くこと——浜昇の戦後と昭和

亀岡倫太郎

浜昇の写真家としてのキャリアは決して華々しいものではない。しかしその静かな道行きには、この国が置き去りにしようとする戦後そして昭和の影を深く穿つ批評性が息づいている。

東京・四谷に生まれた浜昇は、大学卒業後まもなく家業の海苔問屋を継ぎ、店を切り盛りするかたわら写真と向き合ってきた。いわゆるプロカメラマンでも芸術写真家でもない浜を最も特徴づけているのは、写真家と海苔問屋という二足のわらじを履きつづけてきたことだ。

浜は「道楽」という言葉をよく口にする。「道楽」は「趣味」とは異なり、その熱中度の高さにおいて本業に支障をきたしかねず、家計をも燃やしかねない。しかしその「道楽」が、ときに途轍もないかたちで歴史の一頁を縁どることがある。全6回にわたるこの企画展で振り返る写真家・浜昇の仕事とは、まさに類いまれな、そして現在もお継続されている、浜の途方もない「道楽」にほかならない。

浜は1975年にWORKSHOP写真学校の東松照明教室に2期生として参加し、翌76年に自主ギャラリー「PUT」を岡友幸ら15名とともに設立する。本格的に浜が写真に取り組み始めた1970年代、学生運動は下火となり、世の中は「政治の季節」から経済中心の社会へと大きく変化していくさなかにあった。「PUT」を始めとする自主ギャラリーもまた、前時代的な政治性を振り払うようにして同時多発的に立ち上げられていく。当時、写真を発表する場といえば、写真雑誌かカメラメーカーが運営するギャラリーくらいであり、それはつまり、既存の権力装置のふるいを通過した者のみが発表のチャンスを得られることを意味していた。自主ギャラリーはそうした体制に抗うべく編み出された、ひとつの方法論でもあった。写真展の企画から宣伝、会場設営、運営にまつわる雑務までのすべてを写真家たち自身が担うことで、自由な発想で写真を制作・発表できる場を確保することが希求された。しかし80年代半ばまでの10年のうちに、その大半は姿を消すこととなる。浜らの「PUT」も同様、設立から3年後の1979年に解散を迎える。浜は当時のことを次のように語る。

大きな理想ではなく足元を大事にしようという流れから自主ギャラリーがい

くつも立ち上がり、自分たちのリアリティを求めていく実験が行われたのが70年代だった。けれども、80年代に入り社会が経済的に豊かになると、無私無欲な写真青年は次第に減り、インディペンデントな個人の写真家は少なくなっていった。

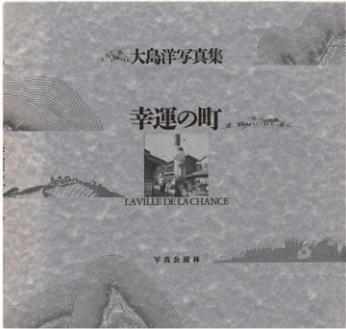
「PUT」解散後も撮影を継続するものの、浜の関心は次第に写真展の開催から写真集の出版へと移行していく。1987年に自ら出版レーベル「写真公園林」を設立し、大島洋の写真集『幸運の町』を第1作目として刊行し、出版業に乗り出す。しかし、第2作目として刊行した自身の『フロム スクラッチ』の売れ行きは芳しくなく、両親の介護などに追われるなか、写真公園林は一旦の凍結を見る。

2007年、かつて同時期にWORKSHOP写真学校の森山大道教室に参加し、その後も浜と同じく自主ギャラリーを設立した経緯をもつ北島敬三との再会を機に、北島らが2001年からあらたに設立していたphotographers' galleryから写真集『Vacant Land 1989』を刊行する。これを皮切りに、『沖縄という名』『斯克、昭和ハ去レリ』『津軽野』と、昭和を総括するかのように、自身がそれまで撮影してきた写真を写真集へとまとめあげ続けている。

終戦翌年の1946年に生まれた浜がこれまで過ごしてきた時間は、この国の「戦後80年」そして「昭和100年」の歩みとともにある。そのあいだ浜が凝視してきたのは、戦後も変わらず国家が個人の生を顧みることなく収奪していく姿であり、経済成長や安全保障といった肯定的な言葉の陰にそうした事態が覆い隠される様であった。戦後も昭和も、決して終わってなどいない。浜の写真はそこで積み残したままにされてきた問題を露わにし、忘却へと傾くことへ静かに抗している。振り返ってみれば、浜が地に足をつけながら貫いてきた「個」としての独立は、国家や資本の語りに回収されない場所で写真を続けるための方法論だったと言える。市井の写真家そして抵抗する市民として浜が記録してきた写真は、この国の来し方をいま一度問い直すための確かな手がかりとなるはずだ。

写真公園林

「写真公園林」は、浜昇が1987年に設立した出版レーベルである。宮沢賢治の童話「虔十公園林」に由来するその名称は、レーベル第一作目となる写真集を刊行した大島洋が創案した。風変わりな青年・虔十が周囲の嘲笑をよそに植えつづけた杉林は、やがて子供たちの遊び場となり、虔十の没後に周辺が田畑から宅地へと変化するなかでも残りつづけた。写真公園林が出版する写真集もまた、たとえ当座の理解を得られないとしても、やがて社会に差す一条の光となればよいという浜の思いがその名には託されている。写真公園林の特徴は、まだ名の知られていない写真家の仕事を世に届けることにある。そのため必然的に、写真家の第一作目となる写真集を発行することが多い。浜が自身では成しえないような作品を形にしている写真家の仕事を、時代の波に埋めれさせることなく本という形で社会に種を蒔くことで、きっと虔十が残した杉林のように、時を超えて意義を見出されることがあるはずだ。その希望を糧にレーベルを継続してきた「出版者」としての側面は、浜昇という写真家の仕事を考えるうえで欠かすことができない。

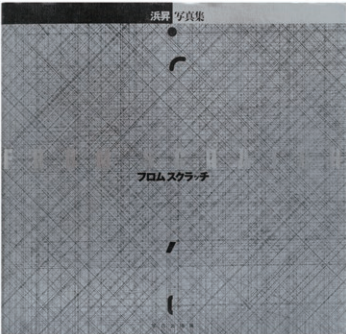


大島洋

幸運の町 (1987年)

B5変型判|並製|モノクロ|132頁 品切重版未定

故郷・盛岡を青春期に撮影した写真で構成する「幸運の町」、凶作と悪政に端を発する江戸末期の一揆の記憶をよすがに三陸沿岸を撮影した「三閉伊」、宮沢賢治の引力のもと写真を編んだ「春と修羅」の全3章。現在時の風景と人々のなかに、もうひとつの〈故郷〉を幻視する。



浜昇

フロム スクラッチ (1990年)

B5変型判|上製|モノクロ|78頁 定価5,000円+税

70年代後半、浜は新宿を中心に街の至るところに残されたスクラッチ（傷）を記録する。政治から経済へと中心が移る時代の狭間にあって、大きな物語を失った主体の揮発感が、モノともイメージともつかない希薄な痕跡に託されている。

【論考】……鈴木和成「オブジェと写真」

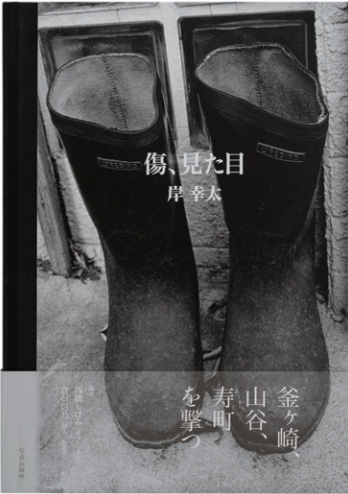


岡友幸

BOTA (2013年)

A5変型判|上製|モノクロ|156頁 定価4,200円+税

かつて日本最大の産出量を誇るも石油の普及により次々と閉山を迎えた、筑豊をはじめとする炭鉱町のその後。「ボタ」とは、石炭採掘時に商品価値がないとして廃棄される石の通称。石炭から石油、そして原子力へと移り変わってきた時代とそこに暮らす人々を、ボタ山は静かに映し出す。



岸幸太

傷、見えた目 (2021年)

A4判|上製|モノクロ|232頁 定価10,000円+税

釜ヶ崎、山谷、寿町を撃つ。日雇い労働者やホームレスの人々が集う「ドヤ街」と呼ばれる場所で撮影された写真は、自らが属する社会の傷としてここに差し出されている。

【論考】……高橋しげみ「労働者-写真家——岸幸太、まなざしの革命」、倉石信乃「無告と呻吟——岸幸太の写真へ」

笹岡啓子

Remembrance

三陸、福島 2011-2014 (2021年)

B4変型判|上製|カラー|142頁|定価9,000円+税

2011年の大震災以後、東北を幾度も訪ね撮影を続けた連作。10年を経て提示される、あの時からの4年間。出来事の「後の世界」に注視し、「後の想い」を呼び覚ます。静寂な光を湛えた写真が問いかける——〈私たちの生きる場所〉はどこか。

【論考】……倉石信乃「後の世界——笹岡啓子の写真と思考」



- 1946東京生まれ
- 1969早稲田大学卒業
- 1975WORKSHOP写真学校東松照明教室に参加
- 1976自主ギャラリー「フォトギャラリー PUT」設立に参加
「記述」PUT（東京）＊
「DISTANCE」PUT（東京）＊
- 1977「新コンテンポラリーフォトグラファーズ展」、《夜想》、PUT（東京）
「京都アンデパンダン展」、《夜想》、京都市美術館（京都）
「イルミネーションin東京 part 1」PUT（東京）＊
「イルミネーションin東京 part 2」PUT（東京）＊
「MID SUMMER FESTIVAL」、《妊婦》、PUT（東京）
「自己と写真のためのコンセプト展」、《合言葉・I》、あ〜まん（沖縄）
「今日の写真・展77」神奈川県民ホールギャラリー（神奈川）
「合言葉・II」PUT（東京）＊
- 1978「時分の花」PUT（東京）＊
「風景と事物展」PUT（東京）
「シンポジウム写真展」PUT（東京）
「視覚の現在1」、《変奏》、PUT（東京）
「視覚の現在 静岡展」、《変奏》、静岡県庁西館展示室（静岡）
「視覚の現在 弘前展」、《変奏》、芭撫（青森）
「視覚の現在 姫路展」、《変奏》、姫路市民会館展示室（兵庫）
「視覚の現在2」、《変奏》、PUT（東京）
- 1979「at沖縄」PUT（東京）＊
「ぬじゅんin沖縄・大和 視覚の現在'79写真展」、《変奏》、ダイナハ（沖縄）
『写真誌No.1 視覚の現在』、《表層の戯れ》、PUT出版局
「視覚の現在3」、《表層の戯れ》、PUT（東京）
「MAGIC LANTERN 1」日本雑誌会館（東京）
「最後の写真展」PUT（東京）
「79-80写真は・いま…」、《表層の戯れ》、新宿文化センター（東京）
「MAGIC LANTERN 2」、《表層の戯れ》、新宿文化センター（東京）

- 1980「サマースライドシアター」、《表層の戯れ》、姫路市民会館（兵庫）
- 1987写真公園林設立
- 1990写真集『フロム スクラッチ』（写真公園林）
- 1995「戦後50年沖縄」、《グラウンドゼロ》、県民アートギャラリー（沖縄）
- 2002「琉球烈像—写真で見るオキナワ」フォトネシア／光の記憶 時の果実——復帰30年の波動」
那覇市民ギャラリー（沖縄）
- 2007「写真0年・沖縄」、《沖縄という名》、那覇市民ギャラリー（沖縄）
写真集『VACANT LAND 1989』（photographers' gallery）
- 2008「VACANT LAND 1989」銀座ニコンサロン（東京）＊
「VACANT LAND 1989」大阪ニコンサロン（大阪）＊
受賞「第20回写真の会賞」
「写真の会賞展」、《VACANT LAND 1989》、Place M（東京）
- 2017写真集『沖縄という名』（3部作、ソリレス書店）
「沖縄という名」沖縄県立博物館・美術館県民ギャラリー、gallery ラファイエット（沖縄）＊
受賞「フォトシティさがみはら2017 さがみはら写真賞」
「フォトシティさがみはら受賞作写真展」、《沖縄という名》、相模原市民ギャラリー（神奈川）
「VACANT LAND 1989」photographers' gallery（東京）＊
- 2018「フォトシティさがみはら 2017 プロの部入賞作品展」、《沖縄という名》、新宿 THE GALLERY（東京）＊
- 2019写真集『スク、昭和ハ去レリ』（ソリレス書店）
「スク、昭和ハ去レリ」書肆吉成 GATE ギャラリー（北海道）＊
- 2021「VACANT LAND 1989」photographers' gallery（東京）＊
- 2022「ぬじゅん2022」、《灰と黒い蝶》、プラザハウス Gallery & Space AESTHETICA（沖縄）
- 2023「From Scratch」photographers' gallery（東京）＊
- 2025写真集『津軽野』（Kula Books）

photographers' gallery

【連続展】

浜昇の戦後と昭和

発行日 2025年12月23日
企画：長町文聖
テキスト：亀岡倫太郎
編集：米田拓朗
デザイン：成瀬慧

